

民俗博物館だより



お水取りの茶粥（東大寺）

目次

吉野郡上北山村のトウキビボウキ	高嶋 侑子・白川 朋子	1
大和の茶粥（2）	鹿谷 勲	4
企画展紹介 たがやすー牛とくらしの日々	岩宮隆司	6
民俗公園だより 植樹された樹木	川瀬 浩	11
みんなく春夏秋冬（平成18年度の活動）		12

吉野郡上北山村のトウキビボウキ

—製作工程の記録報告—

高嶋 侑子・白川 朋子

1 はじめに

トウキビボウキは食用の実をとった後のトウキビを使って作る箒である。奈良県吉野地方では、古くからトウキビを材料にこのトウキビボウキが作られていた。トウキビは一般的には和名トウモロコシ (*Zea mays* L) の別称とされるが、調査地一帯においては、和名モロコシ (*Sorghum bicolor* Moench) の別称とされている⁽¹⁾。穎果は赤褐色に実り、食用となる。アフリカ原産と言われており、大正年間に日本に入り、現在では各地の畑に栽植されている⁽²⁾。戦後頃までは奈良県の吉野地方では主食とされており、どの家庭でも栽培していた。しかし、現在は市販のものに押され、トウキビボウキ製作はほとんどされていない。



そのような状況で、現在も上北山村でホウキ製作をされている方がいると聞き、調査をさせていただくことができた。貴重な伝承者とは、南本弘（昭和3年生まれ）・うちえ（昭和6年生まれ）夫妻である。以下は南本弘氏によるトウキビボウキの製作工程の記録を報告したものである⁽³⁾。

2 トウキビボウキについて

弘さんは30才過ぎに、うちえさんの実家からトウキ

ビボウキをもらったことを契機に製作を始めた。箒作りはおもに女性の仕事であったので、製作方法もうちえさんの母親から習い、それを元に自身で創意工夫を重ねてきた。製品は周囲の好評を得て、物産展での展示・道の駅での販売・注文による個人販売などおこなっている。

使用場所は室内が主で、毎日使用する。吉野では箒といえばトウキビボウキを指すほど一般的なものであった。通常の大さは長さが65cm前後で、床や天井、壁などの埃を払うのに使用していた。また、45cm前後の小ぶりのものがあり、煎ったお茶の葉をはき出す時や、神棚の上を掃く時などに使用していた。毛先が14～15cm程減るまで使う（その後は捨てるので修理などは特にしない）。箒は毎年作り、各家庭に5、6本あったという。屋外では使い古したトウキビボウキや市販の竹箒を使った。

戦後、食が豊富になるのにもない、トウキビは次第に栽植されなくなっていった。同時にトウキビボウキも作られなくなっていったという。

3 トウキビ作り

①種蒔…4月初旬頃に種を畑に蒔く。種を蒔いた直後に市販の肥料（油かす・鶏糞）を蒔き、その後、月に1、2回肥料を蒔く。

②本植…12cm～15cmになったら、本植えをする。2、3日後に害虫の見回りをし、その後も何度か行う。害虫被害は穂先が黄色か白色に変化することでわかる。害虫はコメツキバツタの幼虫で、3cmぐらいの大きさと硬くて黄色い。害虫を駆除した後、被害を受けた苗は処分し、別の苗と植え代える。

③収穫…10月に収穫。先手ハサミを使い、頭の位置（160cm前後）の高さで切る。毎年、約400～600本植え、収穫は5割程度である。

④乾燥…収穫したトウキビは7～8本程をトウキビの葉で束ね、実の部分を下にして1ヶ月程干す。実の部分を下にするのは、実の重みでトウキビが折れ曲がるのを防ぐためである。



4 トウキビボウキの製作工程

①実を取った後のトウキビをしめらす。

②トウキビの節を切る。

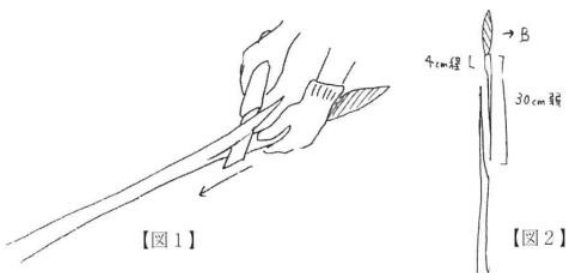
③ジュウノウ（十能）を用いて実の殻をしごく。これはジュウノウの先端をトウキビの茎上で先端に向かって滑らせ、実の殻を取り除く作業のことを指す。殻は全部取り除いてもよいが、完全に除く必要はない。



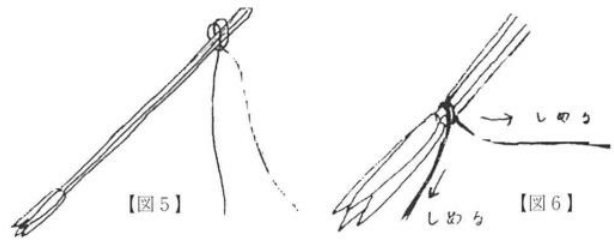
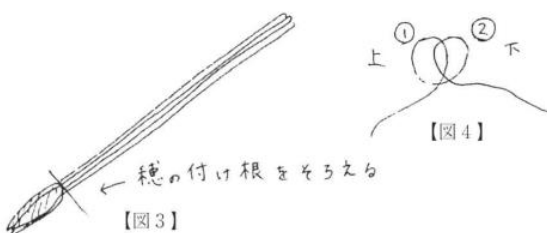
④台に数本のトウキビを載せ、ツチで叩く。



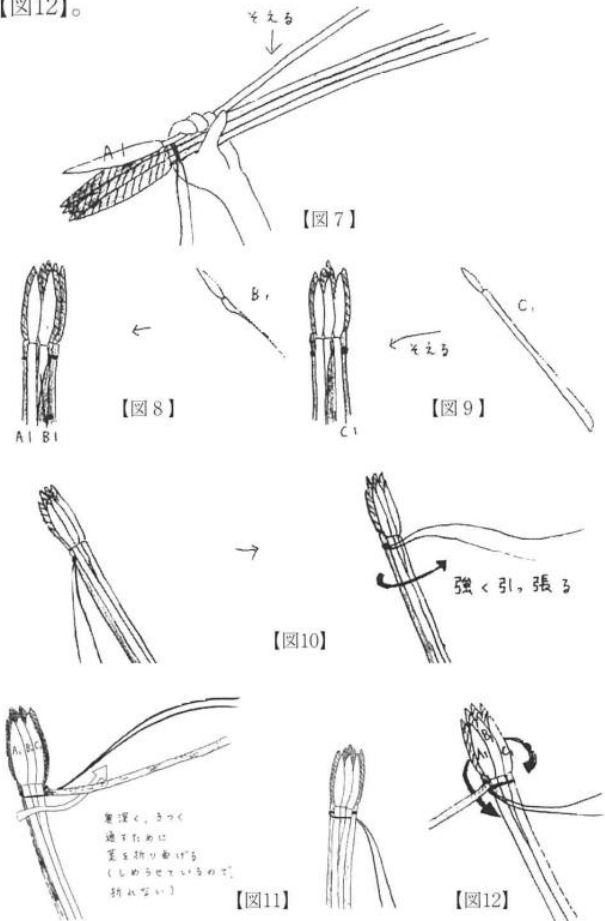
⑤細い茎のもの15本ほどを選びわけ、これを2つに裂く【図1】。裂いた先半分を茎B群とする【図2】。箒にはこの先半分を使用するので、トウキビは真っ直ぐなものでもよい。



⑥茎5本ほどを束にし【図3】、用意した紐④の真ん中で二重の円を作り【図4】、輪の中に束ねたトウキビを通し【図5】、穂の付け根で締め上げる【図6】。



⑦6の束に茎1本（A1とする）を添え【図7】、茎B群より1本（B1とする）を茎A1の右横に【図8】、さらに茎1本（A'1とする）をさらにその右横に添える【図9】。A1・B1・A'1の3本に紐を回し【図10】、A'1右横の茎（6のうちの1本）の下に紐を通す【図11】。紐を回し、A1左横の茎（6のうちの1本）の下に通す【図12】。



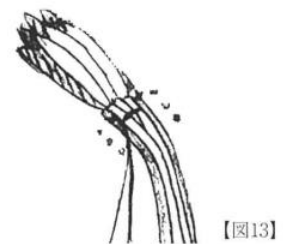
⑧穂の付け根の下3箇所程を折り曲げ、形を整える【図13】。

⑨1cm程下にずらして、⑦と⑧の工程を繰り返す。

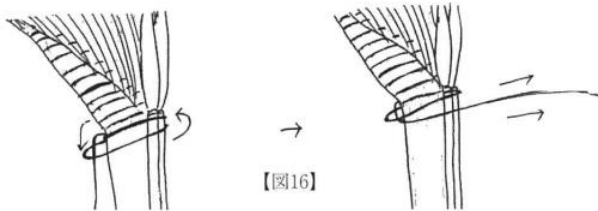
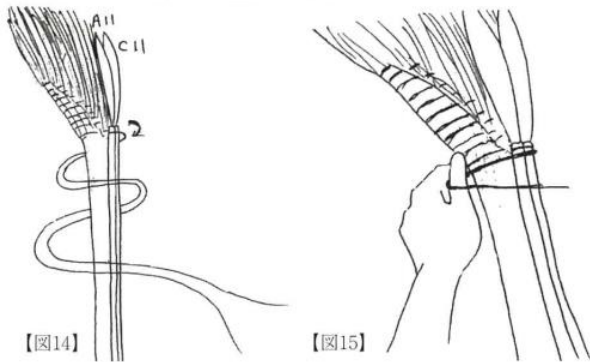
*A1の役目はA2、B1はB2、A'1はA'2がし、A'1右横の茎の役目はA'1、A1左横の茎はA1が担う。

⑩9をA10、B10、A'10まで繰り返す（10回同じ作業を繰り返すことになる）。

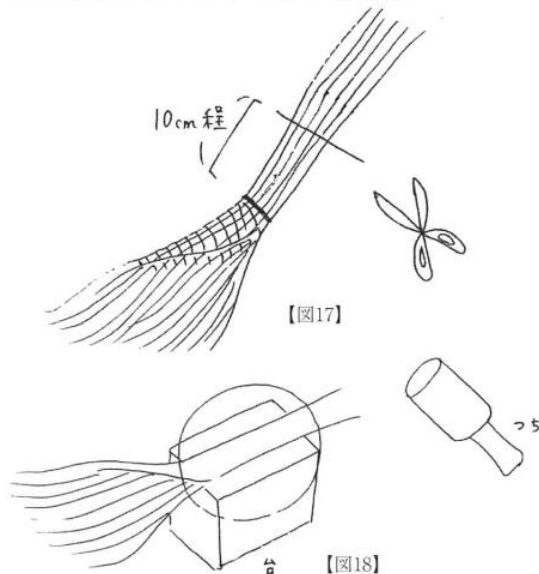
⑪A11、A'11を添え、(a)紐を2周させ【図14】、2周目の終わりに指で隙間を作り【図15】、紐をさらに



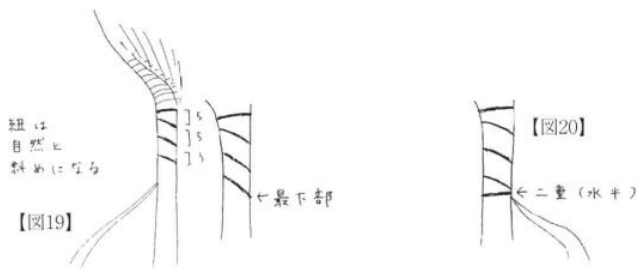
回して上から紐を隙間に通し、締め上げる【図16】。
 (b)さらに1周させ同様にする。



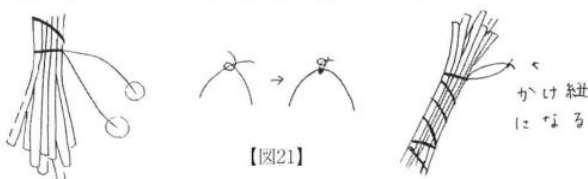
⑫柄の部分太ければ、内側の茎を数本切り【図17】、
 切った箇所を中心にツチで叩く【図18】。



⑬5 cm程の間隔で三回紐を回し【図19】、三回目の
 最下部で二重に巻き【図20】、⑪(a)を繰り返す。



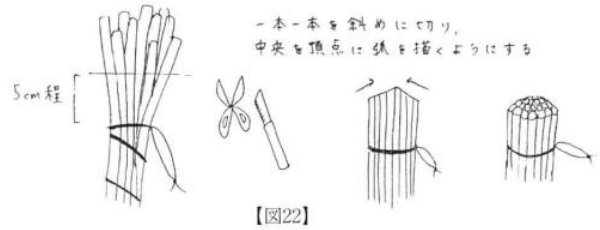
⑭工程の13ついで、⑪(b)を繰り返す。



⑮紐の先端同士を2回結び、かけ紐を作る【図21】。

⑯形を整え、一週間程かけて乾燥させる。

⑰柄の上部を切る。一本一本を斜めに切り、中央を
 頂点に弧を描くようにする【図22】。



⑱完成



注(1) モロコシの呼び方には方言性があり、吉野では「タカキビ」、大阪・京都では「トウキビ」と呼ばれている(八坂安守『日本植物方言集成』八坂書房、2001)。しかし、調査を実施したところ、吉野でも大阪・京都と同じく「トウキビ」と呼んでいた。

注(2) 牧野豊太郎『原色牧野植物大図鑑 離弁花・単子葉植物』(北隆館、1995)

注(3) 調査は奈良県吉野郡上北山村西原において2006年9月28日、10月5日、12月5日の3日間である。また、11月13日には東吉野村三尾でもトウキビボウキの調査を行ったが本稿には未収。なお本稿は、2007年1月に同志社女子大学現代社会学部へ提出した卒業論文の一部を改稿したものである。調査に協力していただいた南本弘・うちえ夫妻をはじめ、迫西四郎・陸代夫妻、指導教授の後藤明先生、現地調査をコーディネートしていただいた川上村文化財保護委員長の石本伊三郎氏、(財)元興寺文化財研究所の角南聡一郎氏に、紙上ではありますが深く御礼申し上げます。

注(4) 用いる紐は現在、紡績糸を使用しているが、昔はツツカズラを使用していた。ツツカズラは調査地一帯の方言で、正式名称はツツラフジという植物である。

大和の茶粥(2)

鹿谷 勲

『東海道中膝栗毛』の奈良茶

明暦の江戸大火後に、浅草金竜山門前の茶店で奈良茶飯が売り出されて流行したことは、既に触れた(『奈良県立民俗博物館だより』通巻96号)。「江戸中端々よりも金竜山の奈良茶くひにゆかんと、殊の外珍しくにぎはひしと『事跡合考』に見えたり。奈良茶といふは和州奈良の土人、朝食に茶粥をもちゆる故に茶飯を奈良茶といふなり。」(『墨水消夏録』文化2年序 伊藤蘭洲)とあるが、後には東海道筋六郷の渡しの手前の蔦屋という茶屋が知られ、その後川向こうの亀屋や万年屋が繁盛するようになった。そのころの様子を、十返舎一九は『東海道中膝栗毛』で、万年屋に立ち寄った弥次さん喜多さんに、「弥二『コウむだをいはずとはやく喰はっし。汁がさめらア。』北『ヲヤいつの間にもってきた。ドレドレ』トならちゃをあり切りさらさらとしてやり」と描いている。「さらさら」という表現からは、茶飯ではなく茶粥か茶浸けのように思われる。奈良茶は江戸ばかりではなく、京や大坂でも流行っていた。「四条河原のなら茶屋、三条五条のはたごや」(浮世草子『好色産毛』2の5)、先の『東海道中膝栗毛』でも、大坂の芝居小屋を眺めながら、「此群集大かたは、おかずとも拾文のなら茶屋へはいり、あるひは大庄のかばやきに鼻いからしてはいるもあり」とある。

井原西鶴と奈良茶

井原西鶴の浮世草子『世間胸算用』には、「つらつらおもみみるに、揚屋の酒、小さかずきに一盃四分づ、につもり、若衆宿のならちゃ、一盃八分づ、にあたるといへり。」(巻二の三「尤始末の異見」)とあり、岩波本日本古典文学大系には、「奈良茶飯。浅草金竜山の奈良茶は一人前銀五分(置土産、4の1)。若衆宿で出す奈良茶は茶碗一杯が銀八分といえは高いものにつく」と頭注が施されている。また、この他に「酒八定マツテ、川海老ノ吸物ニ、ヒネ米ノ奈良茶」(『好色二代男』)や、「近き比、金竜山の茶屋に一人五分づつの(一人前銀五分)奈良茶をしだしけるに、器物きれいに、色色ととのへ、云々」(『西鶴置土産』)と記した所もある。遊里という場所柄もあり、高価かつ流行の先端として奈良茶が扱われていたようすが窺える。

芭蕉と奈良茶

松尾芭蕉も奈良茶に言及している。芭蕉の武蔵曲には「侘びてすめ月侘齋がなら茶哥」とある。月侘齋とは月を侘びる人を風雅人めかして呼んだ仮の名で、奈良茶歌も芭蕉の造語だという。月を侘びる風流人が、奈良茶を食べて歌う歌声は、侘びしくも澄みわたれと、侘びを標榜する俳人の生活を礼賛したもので、弟子支考は「なら茶三石喰ふて後はじめて俳諧の意味をしるべしとは、ある時に故翁の戯ながら」(『俳諧十論』第十)と芭蕉の言葉を伝えている。芭蕉の戯れの言葉には、素朴な茶と米の味が作り出し奈良茶を、侘び暮らしの象徴的な食べ物と考えたことが窺え、芭蕉の知る奈良茶は、当時流行の茶飯にいくつもの副食を付け加えた高価な食べ物ではなく、庶民の味わう茶粥を背景とした発言ではないかと思われる。

奈良茶船

江戸時代、京伏見と大坂間を運行した旅客と荷物の乗合船を三十石船という。この船に食べ物を売りつける船が茶船、俗にいう「くらわんか船」であった。この船は「四文のつりとらんといふに、はやなら茶船漕出して、ついにこれを横著にしける」(浮世草子『日本新永代蔵』四の五)などあるように「奈良茶船」とも呼ばれた。『絵本家賀御伽』(宝暦2<1752>年刊)の挿図はその様子をよく物語っている。



『絵本家賀御伽』

お水取りの茶粥

東大寺の「お水取り」には、練行衆がその日の行を終えて食べる夜食としての茶粥が今も伝わる。二月堂修二会は、毎年3月1日から14日まで練行衆11人によって修される。この法会の最中、正式の食事は、一日

一度正午から食堂で作法に則って行われるものだけである。日中・日没・初夜・半夜・後夜・晨朝と日に六回行われる六時の行法が終わり、参籠宿所に下るのは、午前1時前(遅い時は午前4時前後)となる。その間12時間ほど、灯明の油の匂いと煤が立ちこめる暗い堂内で、声明を唱え、動き回りながら、練行衆は水一滴口にできない。「空腹は耐えられても、喉の渴きを我慢するのは辛い」(守屋弘斎長老談)という。

この茶粥を作るのが、参籠宿所に詰めて練行衆の世話をする童子である。深夜の夜食に備えて、四つに仕切られた参籠宿所のそれぞれに付属する童子部屋の炉で、昼頃から茶を炊き出して準備が始まる。小枝が混じるような安価な番茶を多めにチャンブクロ(茶袋)に入れて、10時間ほども炊く。炊けば炊くほど茶の渋みが消えて味がまろやかになるという。米四合に水五升ほど(10人分)が目安で、鍋は銅製がよいという。洗っておいた米を入れて強火で一気に炊く。炭を立て近寄りにくいほどの強火にして炊くのがいいという。米が割れてハナが咲くようになれば、味噌こして米粒を半分ほど掬いあげて、お櫃に入れて保温しておく。掬いあげた方をゲチャ(揚げ茶の略という)といい、鍋に残った茶粥をゴボ(ゴボウ、ゴボツ)という。ゴボには塩味をつける。食べる時には、この保温したゲチャに熱いゴボをかけて食べる。梅干しやコウコ(香の物)などのキリアテを副食とする。掬いあげる量を変えることで食感が変わる。老僧はゴボを好み、若い僧はゲチャだけを食べてもよい。餅を焼いてゴボをかけてもよい。ゴボとゲチャを食べて、渴きを癒し、行で冷えた身体を芯から暖めて、練行衆は明日に備えてすぐに床に着くという。日々異なる下堂時間を考慮して、毎夜最上のゴボとゲチャを出そうと童子達は心を配る。(この茶粥の作り方は、童子役を本年度45回勤めた野村輝男氏の教示。また朝日カルチャーセンターの資料として作られた岸根一正「東大寺二月堂の修二会の茶がゆ『ごぼう』について」がある。)

「奈良茶」という言葉が、茶粥を意味したり、茶飯を意味したりしているため、その用例が混乱していることは、「大和の茶粥(1)」で記した。しかし、この修二会のゴボとゲチャのことを考えると茶飯も茶粥も出は同じであることが判る。お茶で炊いて飯として食べれば茶飯で、これに残った茶をかけて食べることもできるからである。懐石料理店「辻留」を開いていた辻嘉一は、その著『ご飯の本』(婦人画報社 1960)のなかで、「『あげ茶』これは東大寺の例の修二会のこもりの僧が食べるやつで、とてもよろしい。前期の如く粥茶を煮て、ザルの

うえにぶちまけて、汁をはなしていい、これを椀にいれて、いい茶で、茶づけにするのです。もったいないことしよるのですが、うまいです。」と語っている。ゲチャにさらに別の茶をかけて茶漬けにすることもできるのである。このお水取りの茶粥は、長い間に寺ばかりではなく、周囲にも浸透したようである。茶粥のバリエーションは、さらに詳しい調査が必要であるが、長い時間炊き出す茶粥の製法も、時に聞くことがある。また茶粥を汲む竹製の杓をコボンシャクとかコボジャクというのも、ゴボと関係がありそうに思われる。筆者は朝日カルチャーセンターの特別の講座で、このお水取りの夜食の茶粥を試食したが、これまでに味わったことのない風雅で深い味わいであった。



ゲチャにゴボをかけた茶粥

ゴボとゲチャを組み合わせるといふ茶粥の食べ方の淵源については、今後さらに修二会関係史料などを見る必要があるが、別々のものとみられた茶粥と茶飯をつなぐ先行の食べ物として、東大寺修二会の茶粥を位置付けできるのではないかと考えている。茶粥という簡素な食べ物の中に、奈良の持つ深い伝統が隠れているさまは、驚くばかりだが、その長年のあいだのバリエーションの豊かさにも目を瞠るものがある。

チャンブクロ

最後に、茶粥をこしらえるのに必須であったチャンブクロ(茶袋)について触れておきたい。近年は使い捨ての紙パックも利用されているが、木綿または麻製のチャンブクロは今でも茶舗で買うことができる。必須のもの



左は一般家庭用、右は東大寺で用いられていたもの

でありながら、消耗品の民具であるために資料として残らないことが多いが、このチャンブクロには俗信があった。小島千夫也が「郡山町の門前物と狐四題」のなかで、「ちゃんぶくろ。

有名な大和粥の茶を出すために使ふ茶の容器に使ふ布の袋(木綿)、これをチャンブクロと云ふが、それへ初茄子を添へ、或は中に入れて吊り下げておけば子供が水遊びをしても河童(ガタロ)に足を曳かれる事がないと云ひ、一説には「なつ蟲」の咒だといふ」(『旅と伝説』昭和6年3月号)と報告をしている。興味ある事例であるが、今のところこの一例しか筆者は知らない。

◆ 企画展紹介 ◆

たがやす

—牛とくらしした日々—

岩宮隆司

はじめに

本稿は、平成18年(2006)12月16日から翌年2月12日まで開催した企画展(民具は語るⅡ)「たがやす—牛とくらしした日々—」の展示の意図や概要を述べたものである⁽¹⁾。

1 展示の主旨

「たがやす」(耕す)という言葉は、今日、何気なく使われている。しかし、たがやすとは、本来、「田(や畑の土)を(ひっくり)返す」という意味の「たがえす」が変化したものである⁽²⁾。耕すことは、農作業において、最も基本的な行為でありながら、最も重要で過酷な労働の1つであった。今日では、この作業の大部分を耕耘機やトラクターなどで行っている。しかし、昭和時代の中頃までは、これらの機械の代わりに、牛などを利用していた。農家は、牛を、酷使するのではなく、一緒に働く家族の様に大切にしていた。

しかし、現在では、来館した小学生に、昔、農家で牛を飼っていた理由を問うと、「殺して食べるため」という答えが返ってくる。過酷な労働を共に行き、家族の様に暮らしていた頃の、牛と人との関わり方や記憶などは、忘れ去られようとしている。そこで、今回の企画展では、明治時代の終わり頃から昭和時代の中頃に、県内で使われていた牛耕や耕牛に関する資料約50点を、「展示コーナー」と「学習コーナー」に陳列し、牛耕の知識や耕牛への動物観念などを再認識してもらうために行った⁽³⁾。



写真① 列品解説の状況① (展示室の入り口)

2 展示の意図

当館の利用者は、高齢者や小学生が多い。そして、今回、陳列した資料は、わずか40年前には各地で使われていた道具であり、入館者の興味を引く様な、珍しいものでも、綺麗なものでもない。このような状況下では、入館者の関心の大部分が、陳列してある道具(の使い方)を知っているか、知らないか、ということに、矮小化されてしまうと共に、当館が、昔の道具(の使い方)を懐かしんだり、知ったり、する施設という、短絡的な評価に止まってしまう。それを受けて、博物館は、高齢者や小学生を対象とした展示や普及活動を過度に求められる。公立博物館としては、利用者のニーズに合わせた変化も必要であろうが、博物館の使命に対する真の理解者(積極的な利用者/ヘビーユーザー)を地道に増やしていくことも重要であろう。

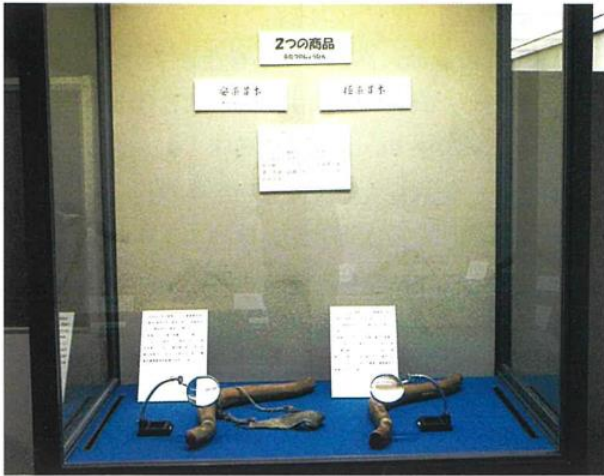
そこで、今回の企画展では、高齢者や小学生に配慮しながらも、「今後、積極的な利用者を拡大させるためには、何をしたらいいのか」ということを意識して行った。以下で述べることは、その試みの一部である。



写真② 列品解説の状況② (左側:一般展示コーナー/右側:特別展示コーナー)

(1) 展示コーナー

展示コーナーに陳列した資料は、図表①の通りである。展示コーナーは、牛耕や耕牛に関する道具や祭りに関する資料を陳列した「一般展示コーナー」と、いろいろな種類の首木を陳列した「特別展示コーナー」に分かれていた。それぞれの資料は、「2つの記録」や「2つの商品」といった「大テーマ」毎に、「嘆願書」「農業日誌」や「安楽首木」「極楽首木」といった2つの「小テーマ」を設けて陳列した。展示資料は、1つの大テーマ毎に、1つの展示ケースを使い、その中に、小テーマとなる2つの資料を左右に陳列した(写真③)⁽⁴⁾。これは、当館の展示室・入館者・展示資料などの状況を考慮し、初めて試みたものである。



写真③ 展示ケース内の状況

展示ケースは、ケース毎に、テーマを完結させると共に、少し様相の異なった資料を陳列した。それによって、入館者の目先が少しずつ変わり、新鮮な気持ちで、次の展示ケースが見られる条件を作った。そして、展示ケース内には、大テーマを理解するために、必要最小限の資料だけを陳列した。それによって、入館者が、展示資料を熟覧し、ケース内で左右に並んだ資料を比較できる条件を作った。

首木の特別展示コーナーでは、拡大鏡を2カ所で使った。これは、単に、小さい文字や見にくい部分を見やすくするためではなく、誰もが持っている“のぞいてみたい”という衝動を利用して、展示資料で注目して欲しい部分を見てもらうために行った。入館者に、拡大鏡をのぞくという自発的な行動を促すことによって、閲覧にメリハリをつけ、展示を何となく見ているという状態を阻止したかった。

展示ケース内の資料は、入館者の視線を意識して、高低差をつけたり、斜めにおいたり、した。これは、単に、資料を見やすくするためではなく、展示資料に躍動感を出すために行った¹⁵⁾。展示ケースのガラス面に対して、常に正面を向いた資料が並んでいると、静寂感はあるが、単調で退屈なものになってしまう。人間は、斜めにおかれたものを見ると、無意識に、正面だけではなくて、上面や側面の情報も認識しようとする。そのことを利用して、資料を多面的に見る意識を芽生えさせたかった。

大・小テーマの名称は、展示資料や解説パネルを熟覧しない人や熟覧できない小学生などでも、分かり易く、記憶に残る様に、単純明快な語句を使った。この様な入館者が、退館後に、展示資料とテーマ名を少しでも覚えてくれれば、所期の目的を達成したことになる。小テーマは、展示品の資料名や左右に並んだ資料

を対比的に理解するのに有効な語句にした。一方、大テーマは、「2つの〇〇」という言葉に統一することで、入館者に、展示ケース内の2つの展示資料の共通性を示すと共に、「次の展示ケースは、何かな？」という自発的な意識を起こさせる意図があった。

大テーマと小テーマには、それぞれ解説パネルを設置した。高校生以上が、数秒で文意の概略を理解できるように、一般的な言葉を用いて短文で記した。小テーマの解説パネルには、資料の収集地、資料の所有者、展示資料を見るきっかけとなる説明、を記した。一方、大テーマの解説パネルには、展示資料の概略と展示資料から判明すること、をそれぞれ1文で記した。書式を統一したのは、入館者の集中力を持続させながら、理解度を上げるためであった。展示資料から判明することの1文は、展示資料と解説パネルを見ているだけでは分からない。文意を理解するには、小テーマの解説パネルやこれまでの知識などを参考にしながら、展示資料を熟覧し、考え込まなければならない。場合によっては、その場で答えが見つからず、退館後に分かるかもしれない。この様な学習行為のできる入館者が、関心を持って解説パネルを読んでくれれば、所期の目的を達成したことになる。

(2) 学習コーナー

学習コーナーは、牛耕用具に触れることができる「触ってみよう！」とビデオで牛耕の作業風景を見られる「見てみよう！」に分かれていた(写真④)。展示コーナーは、上記の様に、高校生以上が、入館中および退館後に、自学できることを念頭におきながらも、全ての入館者が、展示資料や解説パネルを見ながら静態的・受動的に学習できる場として設定した。それに対して、学習コーナーは、以下の(a)～(c)の様な入館者が、動態的・能動的に利用し、それぞれの目的が達成できる場として設定した¹⁶⁾。(a)展示コーナーだけでは物足りない人が、牛耕用具を触ったり、関係資料を調べたり、しながら、学習の度合いを深める。(b)耕牛に接したことのある高齢者などが、牛耕用具を触ったり、牛耕風景を見たり、しながら、回想の度合いを深める¹⁷⁾。(c)「展示資料を見る」「解説パネルを読む」という静態的・受動的な行為が苦手な小学生などが、資料を触ったり、映像を見たり、しながら、学習のきっかけを見つける。

「見てみよう！」で放映したビデオは、大和郡山市在住の秦峰一氏が、昭和54・55年頃に、生駒市南田原で山上文雄氏が行っていた牛耕を撮影したのを、当館

で約30分に編集したものである。この映像を見れば、展示コーナーに陳列した農具の使い方や牛耕の実態などが、分かる様にした。「触ってみよう！」では、展示台の上にカーペットを敷き、そこに体験学習用に収蔵している培土機と牛耕装着用具を並べた⁽⁸⁾。これらの資料を触れば、牛耕の時に、牛が引っ張っていた農具の重さや牛が身につけた用具の素材などが、分かる様にした。



写真④ 学習コーナーの状況

体験学習用の資料は、靴をはいたままでも触れるが、十分に触るためには、靴を脱いで展示台に上がらなければならない。この様な不便さを敢えて設定したのは、以下の様な意図があったからである。(A) 展示台に、資料を落とした時の緩衝材の役割を担わせると共に、靴を脱いでも触りたいという有志者に、利用を制限することで、入館者の怪我や資料の損壊を防ぐ。(B) 展示コーナーで、「(展示資料を) 見る → (次の展示ケースに) 動く」という単調な行動を繰り返し、静態的な状況になっている入館者を、靴を脱ぐという単純な行為を通して、新たな気持ちで体験学習に臨ませる。

3 展示の内容

(1) 一般展示コーナーの内容

「2つの記録」には、牛の購入や割り当てなどが記された「嘆願書」と「農業日誌」を展示した。嘆願書とは、事情を述べてお願いする文書のことである。明治6年(1873)に、伝染病で死亡した耕牛の代わりを購入したいので、その便宜を図って欲しいことを奈良県令に依頼したことが記されていた。農業日誌には、昭和10年(1935)の牛やおからの申込状況などが記録されていた。これらの資料から、牛を手に入れることが農作業にとって重要であったことや、村の有力者が牛の調達や分配に関わっていたことなど、がうかがえる。

「2人の開発者」には、明治時代の末期から昭和時

代の中頃に、牛耕用具の改良に尽力した「丸田兵太郎」と「高北新治郎」に関する資料を展示した。丸田兵太郎とは、成型合板の首木を製作したマルタ工業株式会社の創業者である。高北新治郎とは、高北式犁などを製作した株式会社タカキタの創業者である。これらの資料から、当時、牛耕用具の開発が活発に行われていたことや、牛耕用具の改良や普及が収穫量や国益の増大と密接に関係していたことなど、がうかがえる。

「2つの掛け物」には、牛の産地や品質を示すために、牛の首や背中にかけられた「タスキ」と「ユタン」を展示した。タスキは、牛耕があまり行われなくなってきた昭和38年(1963)に買った子牛(メス)が付けていたものである。ユタンとは、ホコリや湿気を防ぐために、タンスなどにおおいかぶせた布のことであり、紺色の木地に、家紋や牛主の名前などが染め出されていた。これらの資料から、牛の生産者・博労・牛の購入者との関係や、明治時代から昭和時代における牛耕の盛衰など、がうかがえる。

「2つの祭り」には、牛耕のまねなどを行って豊作を祈願した「御田祭」と「野神祭」に関する資料を展示した。御田祭とは、1月から2月頃に、各地の神社で行われる祭りである。野神祭とは、5月から6月頃に、各地の農村で行われる祭りであり、野神と呼ばれている塚や木のまわりで様々な祭事が行われた。これらの資料から、稲の豊作には牛耕が重要な要素であったことや、祭りで使われている牛耕用具には古い形態の農具が使われていることなど、がうかがえる。

「2つの行事」には、1年間働いた牛への感謝を込めて行った「トンド」と「牛滝会」に関する資料を展示した。トンドとは、村の境界などで行われた火祭りのことである。吉野郡大淀町今木では、大晦日(12月31日)の夕刻に、ワラで作った牛と馬を燃やす家があった。牛滝会の時には、華やかな格好をさせた牛を、近くの神社などに連れて行き、無病息災を祈った。これらの資料から、農家が耕牛を大切にしていたことや、農作業における牛耕の重要性など、がうかがえる。

「2つの地域」には、昭和時代の中頃に、「吉野山地」と「奈良盆地」の牛耕で使われていた農具を展示した。農具は、吉野山地の南部では、主に首木だけで引いたのに対して、奈良盆地では、首木と耕鞍で引いた。牛は、吉野山地の南部では、主に稲作だけに使ったのに対して、奈良盆地では、稲作と畑作に使った。これらの資料から、平野部と山間部で使われていた牛耕用具の相違点や、平野部と山間部における耕牛の使用状況など、がうかがえた。

(2) 特別展示コーナーの内容

「2つの時代」には、牛耕が全国で盛んに行われていた「大正時代」と「奈良時代」に使われていた首木を展示した。大正時代の首木は、大正時代から昭和時代の中頃に、吉野郡十津川村で使われていたものである。奈良時代の首木は、7世紀末に、藤原宮を造営する時に使われ、土穴に捨てられたものである。藤原宮とは、694年から710年に、天皇の居所や中央政府の役所などがあった所である。これらの資料から、大正時代と奈良時代の人が使っていた首木の共通点や、民俗資料から奈良時代を類推できることなど、がうかがえた。

「2つのアジア」には、日本列島に隣接している「台湾」と「朝鮮半島」で使われていた首木の写真を展示した。台湾と朝鮮半島の写真は、台湾総督府殖産局と朝鮮総督府勸業模範場が、それぞれ大正10年(1921)と同14年に、在地で使われている農具の実態を調査したものである。これらの資料から、奈良県と東アジアの人が使っていた牛耕用具の共通点や、アジアにおける牛耕技術の伝播など、がうかがえた。

「2つの形」には、首木の形態差を端的に示している「無穴首木」と「有穴首木」を展示した。無穴首木とは、曲がった木の中央部に、穴があげられていないものである。全国的に見れば、耕鞍を使わないで、無穴首木だけで農具を引っ張る地域もあった。有穴首木とは、曲がった木の中央部に、穴があげられているものである。この穴に、棒やヒモを通し、牛の首に、首木を固定した。これらの資料から、両者による農具の牽引方法の差や、有穴首木を固定する部位の発展過程など、がうかがえた。

「2つの入手方法」には、「自分で製作」したり、「檜木屋に注文」したり、しながら、入手していた首木を展示した。手先が器用で、首木にする木材が近くにあった人は、自分で製作した。首木を自分で作らない人は、檜木屋に注文した。檜木屋とは、農具の柄など、木材を加工する職人のことである。これらの資料から、自作品と注文品で木材の調達・加工のあり方が異なっていたことや、工場で生産する前には製作者と使用者が密接な関係を有していたことなど、がうかがえた。

「2つの商品」には、工場で生産され、販売された「安楽首木」と「極楽首木」を展示した。これらの首木は、丸田兵太郎が開発し、丸田興業株式会社で製作・販売した首木である。この商品名は、この首木を使うと、農作業の時でも牛が楽であることを示すと共に、購買意欲を刺激するものであった。これらの資料から、

首木による耕牛への負担が大きかったことや、そこに着目した商品開発・販売が行われたことなど、がうかがえた。

おわりに

現在、私は、博物館実習生の協力を得ながら、「奈良盆地の農業生産・生活用具」のコレクション化作業を進めている。今回の企画展は、その成果の一部を公表したものである。また、今回の展示は、ほぼ1人で、企画展の準備、博物館実習、コレクション化作業、を1ヶ月間に並行して行ったために、十分に意を尽くせない点もあった⁹⁾。今回の入館者の反応などを踏まえ、次回展示では、限られた経費と時間の中で、さらなる創意工夫を心がけたい。

注(1) 期間中の入館者数は、開館日数43日間で、3510名であった。その内訳は、12月が9日間で216名、1月が23日間で1398名、2月が11日間で1896名であった。昨年度は、同じ時期に、「農村明治から大正・昭和の冬—春迎の民俗—」(平成17年12月17日から翌年2月12日)というテーマで行った。期間中の入館者数は、開館日数42日間で、3558名であった。その内訳は、12月が9日間で158名、1月が23日間で1848名、2月が10日間で1552名であった。展示期間中の各週の日曜日(12/17、1/7・21、2/4)には、列品解説(13:30~14:15)を行った。列品解説の参加者は、平均すると1回あたり約10名であった(写真①②)。

注(2) 企画展の看板は、以下の3点を要望し、業者にデザインを依頼した(写真①参照)。①「たがやす」という言葉の意味を象徴的に示すために、「た」の字を強調すること、②展示期間を考慮して新春らしい配色にすること、③屋外にも掲示するので、遠くから見て、分かりやすくインパクトがあること。

注(3) 「牛耕」とは「牛を利用した農耕」、「耕牛」とは「農耕に利用された牛」、のことである。

注(4) 展示ケースには、「大テーマ」パネル・「小テーマ」パネル・「大テーマの解説」パネルを壁面の上から下にかけて掲示し、「小テーマの解説」パネルを資料の脇に掲示した(写真③参照)。当初は、壁面の上から下にかけて、「大テーマ」パネル・「大テーマの解説」パネル・「小テーマ」パネル・「小テーマの解説」パネルの順番で掲示する予定であった。

注(5) 企画展の入り口に設置した5枚のパネルも、同じ意図を持っていた(写真①参照)。このパネルは、館長の提言を基に、今回の企画展の主旨を分かり易く示し、閲覧のきっかけにもらうために設置した。当初は、展示の導入空間として、インパクトのある資料や装飾をする予定であった。

注(6) 当初は、このコーナーの利用や学習を促すパネル、牛耕に関する諸種の写真や解説パネル、使用方法や思い出などを教えて欲しい道具の写真、などを、両側の壁面や奥の棚に並べる予定であった。

注(7) 懐かしい道具を触ったり、見たり、しながら、過去を回想することが、高齢者の心身に良い影響を及ぼすと言われている。近年、当館でも、収蔵資料と福祉との関わりを考える取り組みがなされている。

注(8) カーベットは、学習コーナーの照明の色や照度、奥に設置された収納棚の色などを考慮し、茶色と緑色で全体の雰囲気を整えると共に、培土機と牛耕装着用具の設置場所を明示した。培土機と牛耕装着用具の下のカーベットは、展示室内に色調のアクセントを加えると共に、体験学習を終えた入館者が、自ら使った資料を元の場所に並べてもらう意図があった。

注(9) 「奈良盆地の農業生産・生活用具」のコレクション化作業については、拙稿「奈良盆地の農業生産・生活用具—コレクション化に向けて—」(『民俗博物館だより』94【奈良県立民俗博物館、2004年】)を参照。学習コーナーの「見てみよう!」や一般展示コーナーの耕牛に関する祭りの展示準備や内容理解については、大宮守人・横山浩子氏の協力を得た。記して謝意に代えたい。

展示内容			陳列資料			
コーナー名	大テーマ	小テーマ	資料名	収集地	所蔵者	登録番号
牛耕や耕牛の一般展示	2つの記録	嘆願書	嘆願書	奈良市疋田町	借用品	-
		農業日誌	農業日誌	香芝市逢坂	当館	9919828
	2人の開発者	丸太兵太郎	耕鞍	生駒市谷田町		9917754
			首木	大和郡山市野垣内町		
	2つの掛け物	高北新治郎	昭和天皇行幸時の写真 賞状などの写真	三重県名張市夏見	借用品 (株式会社タカキタ)	-
		タスキ	牛のタスキ	奈良市疋田町	当館	9916052
	ユタン	牛のユタン	宇陀市菟田野区下芳野	2100246		
	2つの祭り	御田祭	御田祭の写真	小泉神社：大和郡山市小泉町 和邇下神社：天理市標本町	当館	-
		野神祭	野神祭の牛・馬	天理市新泉町		9901167 9901168
	2つの行事	トンド	牛と馬	吉野郡大淀町今木	当館	9900871
		牛滝会	鈴	宇陀市菟田野区下芳野		2100243
			牛の鞍		2100238	
	2つの地域	吉野山地	犁	吉野郡十津川村武蔵	当館	4300066
			馬鋤	奈良市大柳生町		4300083
			鼻輪	吉野郡十津川村武蔵		9917273
			牛耕装着用具	吉野郡十津川村武蔵		9919041
		奈良盆地	犁	生駒市上町		900096
			馬鋤	天理市杉本町		9917783
板馬鋤			葛城市北花内	9919999		
砕土機			奈良市疋田町	2800062		
培土機			奈良市疋田町	9916059		
作条機			大和郡山市南井町	9917540		
カルチベーター	御所市柳原	9917328				
首木の特別展示	2つの時代	奈良時代	首木	藤原宮跡 SK1380 出土 〔木器集成図録 近畿古代編〕 1208号、1985年)	借用品 (奈良文化財研究所)	-
		大正時代		吉野郡十津川村武蔵	9917853	
	2つのアジア	台湾	首木の写真	〔復刻 台湾の農具〕 (慶友社、1992年)	当館	-
		朝鮮半島		〔復刻 朝鮮の在来農具〕 (同上)		
	2つの形	無穴首木	首木	奈良県	9917859	
		有穴首木		宇陀市菟田野区宇賀志 吉野郡黒滝村寺戸 奈良県	9917854 9918910 9917819	
	2つの入手方法	自分で製作	首木 (未加工)	香芝市逢坂	9918893 9918894 9918895	
		樫木屋に注文	首木	天理市標本町 奈良県	9919967 9917821	
	2つの商品	安楽首木		奈良県	9919033	
		極楽首木	奈良市学園南	9915022		

図表① 展示資料の一覧



民俗公園だより

植栽された樹木

川瀬 浩



前回(97号)掲載の「民俗公園だより 大和民俗公園のあらまし」で、大和民俗公園の面積区分を植栽地4.5haと里山9.6haに大きく分かれていると記した。その内の植栽地は、公園建設時に一度造成されて、そこに外部から造園用樹木として搬入され、植えられた木が大部分である。昭和48年から約34年を経て、その間に枯れて失われた樹木もあるが、植栽樹木の現状については、平成15年度に樹木台帳調査が行われており、そのデータから、高木、低木別に植栽本数の多い順にベスト10を表としてまとめた。

【高木】

高木は72種類、約8,300本が現在植栽されている。それを常緑樹、落葉樹で分けると6,700本と1,600本で約8:2の割合で常緑樹が圧倒的に多い。景観構成からいうと、関西は照葉樹林帯に属し、この比率も妥当と思われる。

さて、公園に樹木を植栽する場合には、大きく二つの目的で植えられる場合が多い。一つは景観樹、すなわち公園の風景を維持するために植えられる樹木で、大木になる木が多い。表ではシラカシ、モチノキ、クスギ等、表にはないが、アラカシ(141本)、クスノキ(125本)、ケヤキ(86本)シイノキ(42本)等がこれに続く。

もう一つは、花木といわれる樹木で、来園者に季節の折々の花を愛でてもらうために植えられる種類である。表ではサザンカ、サクラ類、ツバキ、キンモクセイ等がこれにあたる。表にない種類では、ウメ(171本)、サルスベリ(42本)等がこれに続く。

なお、サクラ類と記したが、この内容は、ヤマザクラ、ソメイヨシノ、ヤエザクラ、シダレザクラ等で、これらの木は花を楽しむ花木の要素とともに、景観を維持する役目も担っている。

【低木】

低木は49種類、約22,000本が植えられている。常緑、落葉別では常緑樹が17,300本、落葉樹が4,700本、比率でいうと約8:2で高木とはほぼ同じ割合である。

低木を植栽する場合にも、大きく二つの目的で植え

られる。一つは地被植物の役割、すなわち地面を植物で覆い、景観を良くするとともに、雨等による土壌の浸食を防ぐために植えられる。この目的のために、低木の他には草花や芝生がしばしば使われる。



植栽されたサクラ並木(八重ザクラ)

もう一つは、高木のところで述べたと同じく、季節の花々を楽しんでもらうために植えられる種類である。表内の低木は、圧倒的に花木が多く、ツツジ・サツキ類、ウツギ、アジサイ、ヤマブキ等がこれにあたり、表以外ではクチナシ(366本)、ユキヤナギ(316本)、レンギョウ(102本)が続く。なお、表にあるチャノキは、奈良県東部山間地の特産である茶の栽培を知ってもらうために植えられたものである。

その他に、民俗公園内に人間の手によって植えられた樹木としては、昭和48年の公園建設以前に、個人の土地所有者が植えたスギ、ヒノキ、カキ等の樹木があり、伝習農場時に植えられたメタセコイアやモリシマアカシアもこの土地の歴史を語る遺産として残っている。

順位	高木		低木	
	種類	本数	種類	本数
1	サザンカ(常)	1,277	ヒラドツツジ(常)	6,598
2	シラカシ(常)	1,049	サツキ(常)	5,134
3	カナメモチ(常)	962	チャノキ(常)	2,531
4	モチノキ(常)	949	ウツギ(落)	1,805
5	ウバメガシ(常)	935	アベリア(常)	1,068
6	サクラ類(落)	698	ドウダンツツジ(落)	956
7	ツバキ(常)	416	アジサイ(落)	595
8	クスギ(落)	290	キリシマツツジ(常)	580
9	ヒイラギ(常)	272	マサキ(常)	526
10	キンモクセイ(常)	228	ヤマブキ(落)	484

(落)は落葉樹、(常)は常緑樹

民俗公園内の植栽本数の多い樹木 ベスト10

みんなく春夏秋冬

平成18年度の活動報告

【展示】

企画展示室にて特別展1回、収蔵品展3回を実施しました。あわせて、学芸員による企画展列品解説9回及び特別展列品解説3回を実施しました。

① 4月29日～8月27日

民具は語るⅠ (収蔵品展)「水の民俗－生命と社会を支えるシステム－」

② 9月23日～11月26日

特別展「くらしを支えた手わざ－鍛冶屋・榎木屋－」

③ 12月16日～2月12日

民具は語るⅡ (収蔵品展)「たがやすー牛とくらしの日々－」

④ 2月26日～4月8日

季節展 (収蔵品展)「ひな祭り－人形たちの宴－」



特展の列品解説

【コーナー展示】

館内通路の展示ケースを利用して、季節や展示に関わるコーナー展示を実施しました。

① 4月20日～6月30日「出雲人形と奈良張子鹿」

② 4月28日～6月6日「五月(さつき)－田植え月－」

③ 6月7日～9月8日「照る日 雨の日－農作業における雨具と除草用具－」

④ 7月1日～8月30日「夏の枕－涼をよぶ工夫－」

⑤ 9月1日～「火をおこす」

⑥ 9月10日～12月14日「酒の器」

⑦ 9月17日～12月21日「収穫とまつり」

⑧ 12月15日～2月23日「牛に願いを託して－牛をえがいた小絵馬－」

⑨ 12月23日～1月30日「お正月」

⑩ 1月31日～2月28日「藁とくらし」

⑪ 3月2日～4月28日「化粧用具と髪飾り」

【催し物】

① 4月23日

民俗映像上映会「お茶を作る－大和茶の生産と自家製茶－」(平成17年度当館編集映像の一般公開)

② 5月14日

国際博物館の日記念講演会「海外の民家・日本の民家－保存と活用－」 櫻井敏雄氏 (近畿大学教授)



櫻井敏雄氏による講演

③ 7月16日

民俗映像上映会・8ミリがとらえた大和の風土とはたらく人々Ⅰ 「金魚出生」(1969年制作)、「大和三輪の手延素麺」(1978年制作)、「だるま窯の瓦やさん」(1984年制作) 秦峰一氏 (大和郡山市映像クラブ会長)

④ 11月19日

民俗映像上映会・8ミリがとらえた大和の風土とはたらく人々Ⅱ 「筆師」(1979年制作)、「陶芸一途」(1978年制作)、「出雲人形」(1981年制作)、「能登の塩土」(1979年制作・参考上映) 秦峰一氏 (大和郡山市映像クラブ会長)

⑤ 10月15日

特別講演会「職人の説話」 齋藤純氏 (天理大学教授)

⑥ 12月10日

体験学習「しめなわづくり」 吉岡秀信氏

⑦ 2月11日

普及講座・ならみんぱくの活用術「民具のカー回想法とは」 岡田夏憂氏 (介護福祉士)・永田操氏 (陽生苑・健康運動指導士)



アンカやコタツを囲んで回想法を体験

【博物館実習】

学校学習の場に博物館資料を生かす体験学習の試みとして昨年度に引き続き高校生向けの博物館実習を実施。また、学芸員資格履修課程の一環として従来からの大学生向けの博物館実習を実施しました。

- ①11月23・25・26日 (高校生向けの博物館実習)
法隆寺国際高校 (歴史文化コース) 3名
- ②5月28日・5月30日～6月3日・8月1日～8月5日・11月14日～11月18日 (大学生向けの博物館実習)
8大学 20名

【文化財指定】

①平成19年3月11日

当館所蔵の「吉野林業用具と林産加工用具」1,908点が国指定の重要有形民俗文化財となりました。当館としては初めて、県内では5件目の重要有形民俗文化財であり、民具関係としては「十津川郷の山村生産用具」に続いて2件目となります。吉野杉で全国的にも有名な川上村を中心とした吉野林業の山林用具をはじめ、黒滝村や川上村、天川村の樽丸、下市町の割箸や桶、野迫川村の丸箸や経木、天川村の曲物や平杓子、大塔村の坪杓子、あるいは吉野の木地屋 (轆轤師) が使用した挽物用具など杉、桧の人工林だけでなく、天然林をも含めた吉野地方の豊かな山林利用を語るコレクションです。



出席者を代表して交付式でお礼の挨拶をする森岡館長 (東京九段の如水会館)

②平成19年3月30日

当館所蔵の「奈良県の牛耕用具」544点が県指定の有形民俗文化財となりました。当館所蔵の資料が県指定文化財となったのは、実に24年ぶりのことです。牛耕用具は、カラスキヤマンガなど、牛耕の時に使われた農具、クビキヤク



牛耕用具の整理風景 (当館収蔵庫)

ラなど、牛耕の時に牛につけられた道具、オシギリやカイバイレなど、牛の世話に使われた道具、の3種類に大別されます。牛耕とは牛を利用した農作業のことです。県指定となった牛耕用具は、奈良盆地における1反あたりの稲の収穫量が、全国でもトップレベルであった頃 (明治時代中期から昭和時代中期) に使われていた道具であり、戦前における県内各地の庶民の暮らしぶりや高度な農業技術の実態などを示すものです。

【その他】

・10月18日

2006 A C C U ユネスコ青年交流信託基金事業「文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム」による研修生受入を実施。アジア各国の考古・建築・行政等の文化財保護担当者10名が来館し、奈良県の無形遺産保護の概要を聞き、特別展観覧と解説を受け、民家でカマド炊きご飯でおにぎり体験を行いました。



カマド炊きご飯でおにぎり体験をする研修生

【表紙写真説明】

平成19年2月18日に東大寺で行われた朝日カルチャーと大仏仰讃会共催の講座で、お水取りの茶粥を再現する野村輝男氏。炊きあがった米を味噌こして掬い上げてお櫃に入れるところ。

奈良県立民俗博物館

開館時間：午前9時～午後5時 (入館受付は午後4時30分まで)

※民俗公園内の民家集落は午後4時まで

休館日：月曜日 (休日にあたる場合は翌日に振替)

年末年始 (12月28日～1月4日)

観覧料：大人200円 大・高生150円 中・小生70円

※20名以上、団体割引あり

※65才以上、身障者と付添1名は無料

交通案内：近鉄郡山駅→奈良交通バス①のりば→「矢田東山」下車

→北へ徒歩7分/公園・博物館利用者専用駐車場あり

奈良県立民俗博物館だより Vol.34 No.1 (通巻98号)

2007 (平成19) 年5月31日発行

編集発行 奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地

TEL 0743-53-3171 / FAX 0743-53-3173

印刷 共同精版印刷株式会社

〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6